



大妻多摩中学校

二〇二二（令和4）年度

入学試験問題（第一回）

【国語】

時間 50分

2月1日（火）

【注意事項】 1 問題は15ページまであります。

2 指示があるまで、この冊子を開いてはいけません。

3 答えはすべて、問題の指示に従って解答用紙に記入してください。

4 句読点やカギカッコは一字と数えてください。

5 ページが抜けていたり、印刷が見えにくい場合には、手をあげて知らせてください。

一

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。字数制限のある問題は、句読点やカギカッコも一字と数えること。

人種や民族などさまざまな「ちがひ」をもった人々が共に生きること、
① 多民族・多文化共生にとって「ワンチーム」とは何かを考えようとすれば、私は自分がうけた「ある衝撃」体験をいつも思い出します。

それは (注1) かみさんと二人で初めてマレーシアを旅したときのことです。クアラルンプール国際空港に着き、まずは入国審査です。人の流れにそって歩いていきましたが、審査を待つ大勢の人の群れに驚きました。複数あるカウンターに向けて列の仕切りがあり (注2) 人が並んで待っているのではなく、ただごちゃごちゃと人が群れていました。最後尾はどこだろうと探してもよくわからず、とりあえずゆるゆると動いている人の波にあわせて歩きました。しばらく進んでいくと何人かの係官がいて、複数あるカウンターに均等に人が並ぶように「あつちへ行け、こつちへ行け」と人々に指示していました。雑然と秩序もなく人々が群れており、見た瞬間「どうしようか」と (注2) 逡巡しましたが、実は雑然とみえる人々の群れには一定の秩序が働いており、少し時間はかかったかも知れませんが待っている誰も文句を言うことなく審査カウンターに導かれていきました。私にとって日本では経験したことがない、とても不思議な光景でした。

空港からエアポート特急に乗り三五分で首都クアラルンプールの中心であるKLセントラル駅に着きます。ホテルに行くため、そこから市内を巡めぐっているモノレールに乗り換えです。二両編成のかわいらしいモノレールです。駅につくたびに多くの人が乗り降りしていきます。その「乗客」に、私は驚きました。肌の色や服装など外見がすべて異なる人々であり、話している言葉もすべて異なっていました。今はもう慣れっことですが、最初は一つモノレールに乗り合わせ、彼らと一緒に狭い車内に自分がいることに対して、なんとも言えないようなわくわく感を覚えたことを記憶しています。週末のショッピングモールも同じ光景でした。

マレーシアは、マレー系、中国系、インド系の人々を中心として構成され、さらに欧米系や日本人など異なる人種も暮らしています。信仰する宗教も異なり、中国系のお寺で長い線香を掲かかげて一心に祈っている人々がいれば、向かいの通りに大きなモスクがあり、一日に五回のお祈りを告げる声が拡声器で大きく流れています。 (注3) その近くには極彩色でさまざまな神様の像がこれでもかと

飾られた美しいヒンドゥー教の寺院があり、私たち観光客も裸足になれば寺院に参拝することができます。

市場に行けば、人々の熱気のなかで魚や肉、野菜、果物などが所狭しと並べられ売られています。そこには地元の人々にとっては「あたりまえ」ですが、「独特な匂い」が満ちています。イスラム教徒は豚肉を食べませんが、中国系の人にとって豚肉は必須の食材です。食習慣を守ることは彼らの信仰の証しあかでもあり、市場では奥まった別のところで豚肉が盛大に並べられ売られています。テレビでは、夕方から午後九時くらいまで、各種言語のニュースが順次流れています。同じ話題のニュースもありますが、各民族にとって意味ある個別のニュースも流されています。

まさに「多民族・多文化共生」の「リアル」が、マレーシアの日常を構成しています。ここでは④民族や文化の「固有さ」が強調され、大切にされています。そして同時に「ちがい」を認めたくえでの「⑤」もまた確認され強調されます。定時にテレビで毎日流されていたマレーシア政府のコマーシャルがありました。ここでは「マレーシアは一つ」であることが人々の笑顔とともに伝えられます。市内バスの大半に描かれていたのは、大きな数字の「1」が目立つ広告でした。宗教、言語、文化、生活とさまざまな「ちがい」がある、その意味で異なった人種・民族から構成されているが、マレーシアという国は「一つ」であり、「ちがい」を持つ人々もマレーシアを愛し、マレーシアという国のメンバーであるという意味で「一つ」なのだという⑥明快なメッセージを常に政府は発信しています。

もちろんそうであるからと言って、多民族・多文化の共生という「リアル」に差別や排除、人々の対立や葛藤かっしちなどがまったくないわけではありません。互いが互いを認めざるを得ないがゆえに、こうした⑦人間同士の「摩擦」は、よけいに「見えてくる」でしょう。人々は日常、そのことをどこかで常に意識し続けます。彼らはただ何もしないで「マレーシア人」でいるわけではありません。常に「ちがい」をもつ他者と交信し交流し続けるという営みいとなが彼らを「マレーシア」人にしていきます。こうした他者との交信や交流は、他者との対立や葛藤といったトラブルを処理し、お互いが前に進んでいくことなのです。これこそ⑧私たちにとって他者と共に在り続けるために必須な「日常の政治」の姿と言えるでしょう。私は、こうした人々の「日常の政治」を生きる姿に魅力を感じ、その姿から湧き出てくる人々の「優しさ」に心が動かされます。

“優しさ” と言えば、ボルネオ島のコタキナバルを街歩きしたときの体験を思い出します。郊外にとても美しい市立モスクがあります。観光客はツアーバスかタクシーででかけますが、私たちは公共バスで行こうと考えました。案内図でどの路線に乗ればいいのかはわかりましたが、どのバス停で待てばいいかわかりません。うろろうしていると近くにいた若い男性が懇切丁寧にその場所を教えてくださいました。

モスク観光後、どうやって市内に戻ろうか、困りました。モスクの前の道路は交通量も多く、バスも結構頻繁に通り過ぎていました。⑨ バス停らしき標識はいつさいありませんでした。仕方なくモスク入り口にいた男性に尋ねると、目の前の広い道路を渡り、市内へ向かう車線脇の少し空いた場所で待っていればいいと、これまた丁寧に教えてくれました。私たちはその場所でものバスをやりすぎし、市内へ戻る番号のバスが近づいてくるのを見つけ、手をあげ、乗り込むことができました。どこまで乗っても1リングिटド（約三〇円）であり、これほど安い移動手段はありません。ただバスは相当使い込まれたオンボロで私の座ったシートはこわれていました。地元の人々はどんどん乗ってきて、市中心にあるデパート前の終点で一斉にみんな降りていきました。そこで暮らす人々の熱気や息遣いを感じることができる楽しい時間でした。

（美しいひろあき 『好井裕明』他者を感じる社会学 差別から考える『ちくまプリマー新書』より）

注1 かみさん——親しい間柄で、自分の妻を呼ぶ語。

注2 逡巡——決断できないで、ぐずぐずすること。

問1

①・③・⑨に入れるのに最も適切な言葉を、次のア～エの中からそれぞれ一つずつ選び、その記号を答え

なさい。ただし、同じ記号を二度以上使用しないこと。

ア たとえば イ つまり ウ でも エ また

問2

②に入れるのに最も適切な言葉を、次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

ア 自然と イ 雑然と ウ 整然と エ 歴然と

問3

——線部④「民族や文化の『固有さ』が強調され、大切にされています」とありますが、その例にあてはまらないものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

ア モノレールの乗客は、肌の色や服装など外見がすべて異なる人々であり、話している言葉もすべて異なっている。

イ モスクから一日に五回のお祈りを告げる声が拡声器で大きく流れている。

ウ 市場では、豚肉は奥まった別のところで盛大に並べられ売られている。

エ テレビでは、各種言語のニュースが順次流れ、各民族にとって意味ある個別のニュースも流れている。

問4

⑤に入れるのに最も適切な言葉を、次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

ア 相違 イ 一律 ウ 同化 エ 統一

問5

——線部⑥「明快なメッセージを常に政府は発信しています」とありますが、その具体的な発信手段は何ですか。本文中の語句を用いて、二つ挙げなさい。

問6 — 線部⑦「人間同士の『摩擦』」とありますが、このことを具体的に述べた部分を、本文中から十字以上十六字以内で抜き出して答えなさい。

問7 — 線部⑧「私たちにとって他者と共に在り続けるために必要な『日常の政治』の姿」とありますが、それはどのようなことをすることだと述べられていますか。その説明として最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

ア 常に「ちがい」をもつ他者と交信し交流し続けるといふ営みを行うこと。

イ 「多民族・多文化共生」の「リアル」によって日常を構成していくこと。

ウ 人々の生きる姿に魅力を感じて、そこにある「優しさ」に感動すること。

エ 現地に暮らす人々の熱気や息遣いを感じられる楽しい時間を過ごすこと。

問8 日本において、人種や民族などさまざまな「ちがい」をもった人々が共に生きるためには、あなたはどのようなことが必要だと思いますか。その理由を含めて、百字以内で述べなさい。

二

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。字数制限のある問題は、句読点やカギカッコも一字と数えること。

大宮本^{おおみやほん}田^た高校の軽音楽部は、犯罪に手を染めた上級生が逮捕されるという不祥事で廃部が決まりかけたが、校長の恩情によつて、「半年以内に活動成果を挙げる事」などいくつかの条件のもと、一時的に活動の継続が認められた。現在の部員は、啓人・伸太郎・勇作・徹の四人である。

気温は高くとも湿度の少ない快適な晴天が続く中、軽音楽部は気味が悪いほど順調な日々を過ごしていた。

放送部が毎日流す洋楽ロックは、軽音楽部の活動に多大な宣伝効果をもたらした。わざわざ尾行するまでもなく、軽音楽部のレパートリーの鼻歌は教室や廊下でしばしば聴かれるようになった。

また、^(注1)森と軽音楽部の静かなる闘争の噂^{うわさ}が水泳部の部員たちを起点に全校に広まり、四人は自分たちの^①あずかり知らぬところで校内の同情と支持を集めていった。

防音幕の前には、漏れ聴こえる演奏を聴きに来る生徒の姿が見かけられるようになり、その数は日ごとに増えていった。ほとんどは勇作目当ての女子生徒だったが、それでも徹は^②が高かった。

本番まであと十日となり、練習にはますます熱が入った。アンサンブルはこれまでで最高の状態で、一曲演奏するたびに誰かが「いまの録音したかった！」と叫ぶほどだった。

軽音楽部の四人誰もが、^(注2)田高^{たか}マニアの日がやって来るのを待ち焦^こがれていた。

自転車組の啓人と伸太郎の二人と別れ、バスを待つ列に並んだ徹は勇作と無駄話に興じていた。

話題はいくらでもあった。^(注3)剛の呼びかけで、本番当日には軽音楽部のOBが一ダースも応援に駆けつけてくれること。最近の^(注4)加藤はときおり、演奏に合わせて小さく頭を振るようになったこと。ほかのバンドやユニットは「ザリガニイーター」や「水

田浩行と彼のハニー・ディップス」など、センスはともかくオリジナルの名前でエントリーしているのに対し、「軽音楽部」というな

んのひねりもない名前で登録してしまった^③ 啓人は許しがたい大罪を犯したということ。

夕闇の中、バス通りにはヘッドライトとテールランプの光跡がしきりに行き交っている。

「文化祭のパンフレットはもう刷っちゃったみたいだから、今から名前の変更は無理っぽいんだよ」

歩道から高さ二十センチほどの縁石の上にひよいと上がると、勇作はいかにも不服そうに言った。

「^④あぶないよ。後ろにひっくり返ったら轢かれるよ」

徹の言葉には耳を貸さず、勇作は続けた。

「まあ、百歩譲って名前は今のままでいいとしても、来年の『田高マニア』までには旗作ろうよ、旗」

「旗？」

「うん、旗。電飾とか、車が包めそうなのでーっかい^(注5) バックドロップとかはさすがに無理でも、旗ぐらいは簡単に作れるよ。で、

ステージの後ろに張るの」勇作は縁石の上で両手を広げた。「ほら、たとえば幅が一メートル五、六十センチあれば、客席の後ろから

でも『なんか張ってあるな』くらいにはわかるよ。こんくらいの——」

ほんの少し、勇作はバランスを崩した。後ろによろけたところに、ワンボックスカーが通りかかった。

ゴツッ

内臓を素手で掴まれるような不快な音だった。

サイドミラーが勇作の右腕を直撃し、その反動で助手席の窓に叩きつけられた。

弾き飛ばされ、回転しながら歩道の上に倒れる勇作の姿を、徹は目を見開いて見つめることしかできなかった。

数メートル先でワンボックスカーが急ブレーキを掛けた。勇作の周りを取り囲んだ生徒たちが大声で騒ぎだす。勇作は横たわった

まま微動^⑤せず、顔をきつくしかめて呻いている。「救急車！」と叫ぶ声が聞こえる。

目の前で起きた出来事が理解できず、徹は時間の流れから置き去りにされたかのようにその場に立ち尽くしていた。

診察室のスライドドアが開き、パンツスーツを身に着けた母親と勇作が、非常灯の緑色に染められた暗い廊下を静かに歩いてきた。外来の診察時間はどうに終わっており、人影の少ない病院は沼の底のように静かだった。

勇作の右腕には白いギプスが嵌められ、肩から三角巾で吊るされている。それ以外にも、左肘には大きな絆創膏が貼られていた。こちらは地面に倒れ込んだ際にできた擦過傷のためのものだろう。

待合室のベンチから立ち上がった軽音楽部のメンバーと加藤の姿を見つけた勇作は、ギプスを嵌められた右腕を左手で指差し、無理やりに微笑んだ。

「ギターはまた弾けるって」

「いつ取れんの、それ」

徹は勢い込んで尋ねた。

「……三週間から四週間先」

徹ばかりでなく、啓人や伸太郎の顔色も一時に沈んでいった。一日や二日で治るような怪我ではないとわかつてはいたが、ひよつとしたらという希望は誰もが抱いていた。その希望が、いとも簡単に打ち砕かれてしまったのだ。

受付の前に立ち、深刻な表情で加藤と話している母親を横目に、勇作は平静を装った声で説明した。

「尺骨とかいう骨の単純骨折だって。レントゲン見たらもう、きれいにポッキリいつてた。でも、先生が言うにはラッキーなんだってさ。車が普通にスピード出したら、腕だけじゃなくて肩もメチャメチャにやられてただろうって。ギプスが取れても、しばらくギターは我慢しなくちゃいけないけど、じゅ、十一月の終わりくらいには前みたいに……」

ベンチにすくと腰を下ろし、勇作は下を向いてしまった。

三人は勇作を取り囲んだが、かけるべき言葉が見つからず互いの顔を見合わせた。連絡を受けて自転車で病院に駆けつけた啓人と伸太郎の額からは、いまだ汗が噴き出ている。

勇作の母親が、スーツ姿の若い男から怪訝な表情で名刺を受け取っていた。おそらくは保険会社の人間だろうが、事故の過失の程

度や保険の適用額などは徹たちにはどうでもいい話だった。いま問題なのは、勇作と軽音楽部のこれからのことだけだった。

「ぼくってほんと、バカだなあ」勇作は、左の拳こぶしを何度も閉じたり開いたりしながら呟つぶやいた。「ほ、本番は十日後なのに、骨折なんかしちゃったよ。こんな大事なときにみんなの足ひっぱっちゃって、どうしようもないバカだなあ」

「いいんだよ、そんなことは。骨折治すことだけ考えよう」

徹はかすれた声で慰めの言葉を口にした。勇作は小さく頷うなずいた。

「三人で大丈夫だよ。ぼくは『田高マニア』に出られなくなっちゃったけど、三人でなんとかなるよね。みんなすごく上手くなっ
たし」

「そういうわけにはいかねえだろ」伸太郎が口くちを尖とがらせた。「メインでギター弾いてるお前が抜けたらどうなるんだよ。啓人はサイド・ギターだろ。啓人のギターだけでも聴ける曲になるのって、せいぜい『ブリックリーグ・バップ』だけだろ。『バスケット・ケース』のイントロなんか啓人は歌だけで、ギターは勇作の一本だけでやってんだからよ。いまさらどうにもなんねえだろ」

言葉を並べながら、伸太郎は自分を責めるように拳こぶしで何度も腿ももを叩たたいていた。これまで自分たちがどれほど勇作に寄りかかっていたのかを痛感しているのだろう。伸太郎も啓人も、そして自分も、音楽的リーダーである勇作に大きな負担をかけていたのだ。勇作を欠いて初めて、徹はそのことに気づいた。

勇作は、伸太郎をなだめるように柔和な笑顔を浮かべ、首を横に振った。

「大丈夫だって。ギターなんて添え物ぐらいに考えればいいんだよ。三人の腕なら客なんていくらでもごまかせちゃうよ。ギターは一本あれば充分だよ」

「カッコつけんなよ、バカ」伸太郎は低い声でそう言った。「お前はもともと自分勝手でわがままな奴なんだから、こんなときだけいい人になろうとすんなよ。周りがいくら引き留めても出るって言い張るのが、お前のキャラだろ」

「ちょっと、伸太郎——」

制止しようとした徹の手を振り払い、伸太郎は息を吸い込むと低く言った。

「伸太郎の言葉に、三人は凍りついた。それについては、待合室のベンチで診断結果を待っていたときからそれぞれの頭にあったことだが、誰も口に出す決心をつけられずにいたのだ。」

伸太郎は続けた。

「練習場所の環境は最悪だし、喧嘩けんかも何度かしたけど、今までこの四人でなんとかやってきたんだ。それなのに本番で一人でも欠けたら、やる意味がない。軽音楽部として出るんなら、この四人が揃そろわないと嘘うそだろ。勇作が抜けた分をカバーするなんてオレたちには無理だし、『お前の分まで頑張る』なんて調子のいいこと、恥ちずかしくて言えねえって」

伸太郎の意見に、勇作は必死めいじに抗あらかった。

「でもそれじゃ、ぼくがみんなの目標を取り上げると一緒だよ。『田高マニア』辞退したら、骨折が治ってもぼくはずっと後7めたい気持ちを引きずることになるじゃん。そんなの嫌だよ」勇作は引き留めるための言葉を懸命に探した。「あと、それだけじゃなくて、『条件三』だつてあるじゃん。成果見せないと廃部なんだよ？ どんな形でも『田高マニア』には出なくちゃ」

「成果はもう見せた」伸太郎はきつぱりと言い切った。「放送部はオレたちがコピーしてる曲のオリジナルを毎日流してるし、防音幕の前にはわざわざ練習を聴きに来る奴もいる。軽音楽部といえば学校の誰でも知ってる部になった。それで充分だろ？ ここまでになった部を、誰が廃部にできるんだよ。もし森あたりが強引にそんなことしてきたら、今度は文部科学省だろうが首相官邸だろうが、どこだつて話つけに行つてやる。だから勇作、お前は余計な心配すんな」

「だけど……」

徹も伸太郎に同調した。

「うん。おれたちまだ二年生だし、『田高マニア』は来年もあるからね。焦ることはない。あと一年あれば力入れて旗も作れるし、今年よりもっとすごい演奏ができる。オリジナル曲だつて作れちゃうかもしれないし」

気楽な微笑みを浮かべながら、徹8は内心で自分に悪態をつけていた。

こんな気休めだ。今年の「田高マニア」は今年一回きりじゃないか。こんな結論で納得できる人間なんているか。押し黙っていた啓人が、初めて口を開いた。これまで見たことのない真剣な面持ちだった。

「いや、みんな待って。待ってくれよ。そんなに簡単に結論出していいのか？ 本番は十日先なんだから、時間はまだある。たくさんの人が俺たちの演奏を楽しみにしてくれてるんだし、簡単に辞退なんて言っちゃいけないだろ」

伸太郎が首を横に振った。

「あんな、勇作の骨折が十日で治るわけがないだろ」

「だけど、もっと抵抗しよう。無駄な努力かもしれないけど、なんとか考えよう。ラクな道を選んじゃダメだ」

「じゃあ、啓人には何かいいアイデアあんのかよ」

「それは……」

「ほら、ねえんだろ」

「みんな、ほんとにごめん」勇作が肩を震わせた。「もう二度とみんなに迷惑かけたくないって思ってたのに、やっぱり迷惑かけちゃったよ」

軽音楽部の四人は、それきり言葉を失ってしまった。勇作の嗚咽^{おえつ}だけが、夜の待合室で聞こえる唯一の声となった。

(こしがや
越谷オサム『階段途中のビッグ・ノイズ』〔幻冬舎文庫〕より)

注1 森——大宮本田高校の教師。軽音楽部に不祥事があつたとき、廃部を強く主張した。水泳部の顧問教師。

注2 田高マニア——この高校の文化祭で開催される、伝統ある名物行事。音楽やダンスの団体がステージでパフォーマンスを行なう。「半年以内に成果を挙げる」という条件をクリアするために、部員はこの行事への参加を目標にしていた。

注3 剛——啓人の兄で、大宮本田高校軽音楽部のOB（卒業した元部員）でもある。

注4 加藤——軽音楽部の顧問教師。

注5 バックドロップ——舞台後ろの幕。

問1 — 線部①「あずかり知らぬ」とありますが、「あずかり知る」の意味として最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

- ア 改定する イ 関与する ウ 貢献する エ 通達する

問2 ② に身体の部位を指す漢字一字を当てはめて、「誇らしい。得意な様子だ」の意の慣用句を完成させなさい。

問3 — 線部③「啓人は許しがたい大罪を犯した」とありますが、このような言葉からどのような状況を読み取ることができますか。その説明として最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

- ア 自分が音楽的なリーダーであるのに、それを認めようとはしない啓人を、本心では嫌っている、ということ。
イ あえてこのような言葉を使うことによって、以前の事件を乗り越えようと皆が前向きになっている、ということ。
ウ 表現はきついがもちろん冗談であり、このようなことが言い合えるほど、部員同士が良好な関係にある、ということ。
エ 意識はしていないがこのような言葉が出てしまい、やはりどこかに以前の部員の不祥事を引きずっている、ということ。

問4 — 線部④「あぶないよ。後ろにひっくり返ったら轢かれるよ」は、この後に起こる悲劇を予告するような役割を持った文であることがわかります。それと同じように、これから良くないことが起こることが暗示されていると読み取れる表現を含む一文を、15行目以前の本文中から抜き出し、その最初の五字を答えなさい。

問5 ⑤ に当てはまる言葉として最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

- アこそ イさえ ウすら エだに

問6 ⑥には、伸太郎のどのような言葉が入ると考えられますか。答えなさい。

問7 — 線部⑦「後ろめたい気持ち」とは、具体的にどのようなことによって生まれる気持ちですか、分かりやすく答えなさい。

問8 — 線部⑧「徹は内心で自分に悪態をつけていた」とありますが、自分に悪態をついたのはなぜですか。その理由として最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

ア 勇作を安心させたいと思っているのだが、かけている言葉にそのような力がないことを、自分自身でもよく分かっているから。

イ 勇作を安心させるためとはいえ、自分が本心から思っていないことを言葉にしていることを、自分自身で許せないと思っているから。

ウ この状況に対してより良い提案をすべきなのに、どうすればいいのか全く思いつかないので、自分でも情けない気持ちになっっているから。

エ 伸太郎の揺るぎない強さに比べて自分の気持ちはまだ不安定で、中途半端な微笑みしか浮かべることができず、そんな自分に^{いらだ}苛立ちをおぼえているから。

問9 この文章の表現の特徴を説明した文としてふさわしくないものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

ア セリフが多いが、それぞれの口調や一人称の表記を変えることで、誰のセリフなのか分かるように工夫をしている。

イ 広く使われているわけではないが印象的な^{ひゆ}比喩(たとえ)を使って、その場面場面の様子を読者が想像しやすいように工夫している。

ウ 登場人物の善人・悪人の区別をはっきりさせてはいないが、読み進めるうちに自然とそれが理解できるような言葉を慎重

に選んでいる。

工 専門的な言葉や固有名詞を多く本文中に使って、読み手が実際にその場にいたり当事者であるかのような感じになる臨場感を出している。

問10 もしも、あなたが本文中の四人と一緒にバンドを組んでいる「五人目の軽音楽部員」だったとしたら、「田高マニア」への出場

について、どのような意見を四人に言いますか。百字以内で答えなさい。理由が明確であれば、結論が何であってもかまいません。解答する際、次の点に注意すること。

- ・ 四人に向かって言うセリフとして答えること。
- ・ セリフの最初と最後につけるカギ括弧（「 」）は不要です。

三

次の各問いに答えなさい。

問1 次の①～⑤の文の——線部のカタカナを適切な漢字に直しなさい。

- ① ニトウリユウ選手として大車輪の活躍を見せる。
- ② 東京オリンピックがカイマクした。
- ③ 政府やタイシカンを通じて連絡を取る。
- ④ キョクチ的に発達した雨雲が通過する。
- ⑤ 自宅療養者への対応にバンゼンを期す。

問2 次の①～⑤の□にあてはまる動物や生き物を漢字一字で答え、ことわざ・慣用句を完成させなさい。

- ① □ も歩けば棒に当たる
- ② 水清ければ □ 棲まず
- ③ 足元から □ が立つ
- ④ □ の耳に念仏
- ⑤ □ に引かれて善光寺参り

以下余白

